

実録 九・一一

豊澤 幸平

二〇〇一年のその日はいつもより一時間早く八時に出社、東京から来ていた本部長と纏めのミーティングを行っていた。八階の小さい会議室、四角いテーブルを真ん中に四人が座っていた。本部長は窓を背に北を向いて座り、私はその対面で窓側を向いて座っていた。八時五〇分ごろ、ふと窓から外を見るとワールドトレードセンター（WTC）から黒い煙がもうもうと出ている。「本部長、会議中ですがWTCから凄く煙が出ています」。本部長は後ろを振り返り「火事が爆発だろう。テレビで状況を調べてみよう」。四人揃って外を見てみると、九時〇三分、南棟に二機目の飛行機が突っ込むのを肉眼で確認できた。「会議、中断しよう」。九時五九分に南棟崩壊、一〇時二八分に北棟が崩壊、二つの高層ビルがもろくも崩れるのは衝撃的であった。これら一連の悲劇を三マイル（五キロメートル）離れたビルの八階から逐一、目届けていた。

直ぐに米国の部門長であった私を中心に対応を開始。本部長は会議のあとその足で日本に帰国する予定であったので新たにホテルが必要、苦労の未やとと確保。全米に散らばっている在米日本人や米人、日本からの出張者は計五〇名、全員の安否確認を手分けして実施。日本からの出張者にC肝炎の人がおり毎日服用が必要な薬が早々に切れることが判明、現地の日本人医師から薬の入手に成功。

これら一連の作業をやつと一七時に完了、当時日本に一時帰国していた家族に電話。日本の本部に安否確認と状況説明のメールを発信したのは一七時三〇分。

帰途につこうとしたが交通機関は全て運行停止、幸い住居はマンハッタンであったので徒歩五〇分でしたどりつく。途中で食料、水を購入しよう店に入ったが、棚のものは殆ど売り切れ。こうして生涯忘れられない長い長い一日はようやく終了。

その日に得た教訓は多いが、緊急事態時の一元的情報管理、国内外への遠出の際の十分な常備薬の持参、携帯は気がついたら充電、水・食料の備蓄等であるが、今でもそれらを実行している。

（二〇二五年十月）